

令和6年度 第2回熊本市小中一貫教育懇談会議事録

日時：令和6年(2024年)9月30日(月)
14:00～15:30

場所：SPring 熊本花畑町 7FD

○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会事務局挨拶（須佐美教育次長）
- 3 議事 協議 本市の小中一貫教育の取組について
 - (1) 事務局説明 第1回小中一貫教育懇談会のまとめ
第2回小中一貫教育懇談会の協議について
 - (2) 意見交換

岡村座長	チーム学校という言葉が文部科学省から出され、だいぶ一般化してきたと思う。狭い意味で言えば、チーム学校とは職員室の先生方だが、文部科学省が想定しているチーム学校というのは、先ほどのスライドにあったような学校だけに限らず、地域の方々や関係する諸機関などを含めて、全体で子どもたちを育てていこうという考え方である。小中一貫教育を推進している熊本市では、そのチームというものを学校と地域だけではなく、学校種も乗り越えて大きなチームを作っていくことを目指している。そのときに、どこが何をしているかという情報交換が非常に重要になってくる。前回もあったように、保護者や地域みなさんに小中一貫教育の取組をどう伝えていくかというのが1つの課題であるので、先生方からうまくいっている取組や本当はこういうことをしてみたいというご意見を頂きながら、うちの学校ならそれはできそうとか、うちの学校でもそういうことだったらできそう、というような形で意見交換が出来れば良いと思っている。 それでは、先生方からご意見をいただく。村上委員お願いします。
村上委員 (吉松小学校長)	本校の児童と植木北中に入学した中学1年生に尋ねたところ、「小学校同士の交流があり、中学校に入学したときに知っている友達がいて、久しぶりに会えた。」「中学校の授業で意見交換をするときに意見を言いやすく、たくさんの意見も聞けた。」という感想があった。先生方もZoomによる交流授業や人権学習への招待で交流をしている。そういった所で先生方にも繋がろうと努力をいただいている。 保護者に対しては、小学校間での合同見学旅行や小中合同の引き渡し訓練など、行事を通して少しずつそのよさが伝わっていると感じている。今年度はアンケートを年度末にとり、よさを実感できる取組を考えていきたいと思っている。1学期は保育園から中学校までのカリキュラムである「きらめきプラン」を昨年度配布しており、その活用状況と意識について、メディアコントロールという項目で、小学校と中学校で同じアンケートをとった。このようなアンケートを実施することで、保護者には「この地区では小中で一緒の取組が行われている。」という印象が伝わっていく。地域の方にとっては大きな行事が年間に数回しかないの、小中一貫教育のよさが伝わっていくのには時間がかかると思っている。 保護者が感じているよさということで、本校では読み聞かせを担当されている保護者があり、中学校にもお子さんがおられる。小学校と中学校にお子さんがおられる保護者には、小中一貫教育の取組が伝わりやすいと考えている。その方は小中一貫教育を知り、田底小ではどんなことをやっているのかを知りたくなり、交流したいということで、ご自身で田底小に連絡をとって訪問された。「小中一貫校になって、中学校には行ったことがあ

	るが、となりの田底小には行ったことがないので行きました。」とおっしゃられた。そういうアプローチもあると教えられた。
岡村座長	メディアに関するアンケートは今後どのように活用していくのか。
村上委員	11月に植木北中校区の保小中連携の日があるので、それまでにアンケートを分析して、それぞれの学校の課題、地域の課題を明らかにして3つの学校が連携をして取組を行っていききたい。
岡村座長	アンケートをとり、そこで出た課題を学校や地域の課題とし、情報を発信していくという取組ということで理解した。
小山委員 (小島小学校長)	小島小、中島小、城西中で生活リズムチェックを行っている。幼小中連携の日に健康教育部会が中心となってスタートし、数年間取り組んでいる。メディアチェックと何時に起きて何時に寝るかという生活リズムについての調査だが、その中でも特に歯の健康が本校区の課題ということが1学期の健康教育部会で明らかになってきた。そこで今年度は歯の健康に焦点をあてて、歯磨きの取組をしている。コロナにより学校で歯磨きができなくなった背景がある。この取組に関しては、スタートするとき各学校で保護者に対し、小中一貫教育の1つとして取り組んでいるというお知らせをした。年度末には中学校区の学校保健委員会を開く予定である。参加者は地域の関係団体、保護者、学校職員。その中でそれぞれの学校の取組を紹介していきたい。地域も巻き込んで取り組んでいる内容である。 職員が小中一貫教育のよさを実感できている部分としては、幼小中連携の中で課題を共有して共通実践していくということである。同じ目標を設定して取り組んでいく。「共に」という意識が職員に芽生えてきている。
坂本委員 (鹿南中教頭)	歯の健康という話だったが、本校で先日学校保健委員会があった。中学校のデータを見ると学校全体の傾向がわかった。視力の低下や肥満というような課題があった。生活習慣に関わる部分なのでPTA、生徒会、職員で生活習慣の改善に向けた取り組みができたらいという話になった。おそらく1つの学校の生活習慣に関する課題は、地域的な課題と重なる部分があると思うので、小学校と中学校が養護教諭を中心にして同じ取組ができると効果が上がるのではないかと感じた。
岡村座長	小島小に関しては、小中合同で取り組んでいるので、これをしっかり発信していくことが大切である。そうすると保護者や地域には中学校区内で同じ取組をしていることが伝わっていくだろう。
川上委員 (桜木小学校長)	本校はCグループであるが、こどもや保護者が小中連携教育のよさを実感する場面を考えてみると、小学校や中学校の入学でスムーズにスタートできた時だと思う。それをより確実なものにするためには、現在、桜木中校区で取り組んでいるような幼稚園や保育園の入学前の面接や情報共有、小学生が中学校に出向いて体験入学や運動会を見るなどの場面をつくっていくことが大事である。 地域を巻き込んでいくということに関しては難しい部分はあるが、桜木中校区は地域の会合に小中学校の校長が参加し、各学校の取組を地域の代表の方々に伝えるようにしている。本校と地域のつながりという点では、地域の方がよくこどもを見守ってくれており、気づきを学校に知らせてくれる。例えば、「こどもが転んでけがをしているので、今一緒にいます。」

	などのお知らせがあり、これらも地域との大切な連携の1つだと感じている。 あとは学習環境というところで、授業で使用する道具が足りない場合は、近隣の学校から借りる場面も出てきた。これも学校間の連携の1つだと思う。運動場工事とプールの改修で、この9月に水泳の授業をしているが、ゴミを拾うプールの網が壊れてしまっており、近くの学校に問い合わせたらすぐに借りることができた。近隣の小中学校でこのようなことができることは非常に心強いことである。困った時にお互いに相談したり、話をしたりできるということが一番大事な部分だと思っている。この点は教員がよさを実感している点である。
福田学校教育部長	Cグループで難しい部分はあると思うが、取組をしている中で校長先生や教頭先生の意識の変化があったら教えて欲しい。
川上委員	困ったときに、教頭が「これは中学校に連絡していいんですかね？」という場面がよくあるが、「気楽に連絡して聞いてみてよい。」と言っている。こどものことや業務のことで何かあれば中学校に連絡する場面が増えてきた。例えば、特別支援学級のお子さんで、中学校を見学したいというときは教頭間で連絡をして担当教員につないでいる。中学校からは「いつでもいいですよ。」と言ってもらっているので、こどもに良いタイミングで実施させていただいている。 また、何か問題があると小学校だけでどうにかしなければならないという以前のような雰囲気はなくなってきた。
福田学校教育部長	これまでの、小学校は小学校、中学校は中学校という部分がなくなってきたということか。
川上委員	そう感じている。小学校は中学校に、中学校は小学校に聞きづらいという雰囲気が以前はあったが、小中一貫教育の取組が始まってしばらく経ち、幼小中連携の日に加え、小中の校長が集まる機会も確実に増えているので、困ったときに問い合わせをしやすい形ができてきている。
岡村座長	これは本当に大切なことで、関係が深まってくことで小中学校間の垣根がなくなり、本当に連携がとりやすくなる。地域の会合について教えて欲しい。
川上委員	自治会の総会、青少年健全育成協議会の総会、社会福祉協議会の総会、コミュニティセンターの総会などに参加させていただいている。そういうところで地域の方をお願いをしたり、逆に地域の現状を教えていただいたりしている。学校の周りが車の抜け道になっており、交通事故防止のために交通安全協会の方の所まで行って、「この辺りを見守りしてもらえると助かります。」とか、「横断歩道のダイヤモンドマークが消えかかっているので、学校からもお願いしているが、交通安全協会からもお願いしてもらえますか。」というような協力依頼をしている。地域との連携により、間接的にこどものためになっていると感じている。
岡村座長	私も以前コミュニティスクールの委員をしていたことがあるが、地区の区長や公民館の館長といった方々としっかりと連携がとれているケースがあった。地域の会合の場に小学校や中学校の先生もいて同じ場所で話をしているということはリンクがしっかり張られていることになる。小中一貫

	教育や幼小中連携教育の下地作りとしても非常に重要なことである。
藤 枝 委 員 (P T A 連 絡協議会)	今まで学校間での先生方の交流は多くなかったのか。
川上委員	それぞれの学校の先生が日々の業務に取り組んでいるので、時間をつくって機会を設けなければ交流は進みにくい状況はある。
藤枝委員	年度末に先生方の異動があるが、先生方は頻繁に異動されているイメージがあり、先生たちは知り合いが多いという錯覚をもっていた。特に隣の学校なら先生方は知り合いであるという感覚が保護者の中にはあるが、そうではないということがわかった。保護者からすると中学校区の先生方の顔が全てわかるだけで保護者としては安心する。
岡村座長	正にそういう状況をつくっていくことが、熊本市が小中一貫教育に取り組んでいる目的の1つだと思う。近隣の学校の先生方は知り合いであるというような保護者がもっているイメージに現状が近づきつつあるということは、少しずつそのギャップが埋まりつつあるということだろう。政令指定都市などの大きい自治体になってくると教員数も多くなり、全ての学校の先生が知り合いということにはならない部分がある。ある意味それを打破するために小中一貫教育の取組を行っているという認識でよい。
新 川 委 員 (託 麻 東 小 教 頭)	グループアプローチを小中で共通実践しているが、これが本校の1番の宝である。こどもたちがどういったときに安心感をもてるかということを考えた場合、少しでも小学校でしていたことを「中学校でもするんだ。」と感じられる場面があると、こどもたちはほっとすると思う。それがこどもたちの落ち着きにつながっている。 二岡中と託麻東小は運動場を挟んで隣同士にあり、物理的にもとても良い環境にあるが、本校は1300人、二岡中はその半数で合計すると2000人となり交流は難しい。例えば、中学3年生と5、6年生、中学2年生と3、4年生という形で交流するという方法もある。本校は特別活動が盛んであり、特別活動を通して中学校との交流が進めばよいと考えている。 これから小学校と中学校がつながっている新校舎が検討されているので、色々なことについて中学校と会議をしている。会議を重ねているからか、お互いに遠慮なく色々なことをお互いに聞けるようになってきた。例えば「今日〇〇さんが学校に来ておらず、家庭との連絡が取れない。中学校にお姉さんがいるから中学校に聞いてみよう。」といったことや、逆に中学校から「〇〇さんが来ていないけど小学校はどうですか。」という電話かかってくる場面がある。こういうことができるようになったのも、中学校と小学校が頻繁に話をしていることの成果だと感じている。 先ほど話があった特別支援学級の児童が中学校の特別支援学級の体験をするときには、すぐ近くなので「次の時間だけ中学校に行ってきます。」というような動きができる。職員も一緒についていけるので利点が大きいと感じている。 二岡中校区では、地域の会議が月1回行われている。青少年健全育成協議会の方がラジオ体操カードを作り、こどもたちに配ってくださった。景品も準備していただいた。また、コロナ以前に行われていたデイキャンプがあった。中学生の参加者は少なかったようだが、小学生は多かった。 これから私が幼小中で連携して取り組んでみたいと思っていることは、

岡村座長	メディアに関することである。小学校に入学してきたときにはメディアにどっぷりで引きはがせないこどもが増えている。小学校から対応しても遅いと感じているので、幼小中と保護者で連携をして取り組んでいくと、みんなが幼小中連携のよさを実感できるのではないかと考えている。 幼小中において、1つ前の校種でどんな課題があり、どういう育ちをお願いしたいかという部分は非常に大切になってくる。小学校や中学校でメディア教育をすると思うが、連携をしながら長期的な視点で行っていくことは効果がある。小学校でメディアにどっぷりつかっている状況では、中学校では対処療法にならざるを得ない。もっと早い段階でメディアとの付き合い方を学ばなければならない。メディアとの付き合い方自体をカリキュラムまでにはいかにしないにしても1つの小中での教材として扱うことで小中連携につながっていく。このような一貫した指導をする機会があればぜひ挑戦していただきたい。幼稚園や保育園になると、どのように保護者をお願いしていくかということも含めて地域の方を巻き込んでいく工夫が必要になる。
藤枝委員	9月にPTAの政令都市情報交換会が熊本で開催された。熊本市がホストで分科会が4つあった。その中の1つはメディアに関することだった。メディアとの付き合い方を学ぶということで、動画をつくる内容だった。自分たちのPR動画をつくる方法を学び、PTAの活動にいかしていく取組だった。そこで感じたのは、小学校や中学校で「これはだめ」、「あれは危険ですよ」というようなマイナスの教え方ではなく、テーマを決めて1年間で動画をつくるような学習が小中一貫教育の1つの取組としてあってもよいと思った。
岡村座長	学校の先生方がメディアを使うことをどう制限するかという議論をしがちだが、禁じることにあまり意味はないと心理学や脳科学の世界では言われている。大人がこどもを制限してもほぼ効果がない。保護者がルールを一緒に守れるかどうかが大事になっている。母親がこどもに「あなたYouTube ばかり見ていないで勉強しなさい。」と言いながら母親はYouTube を見ているというような状況は親子関係自体を危うくさせる。ルールづくりを家庭内でどのようにつくっていくのか。極端なことを言えば親もそのルールに従うことができるぐらいのものをどうつくっていくかという意味では、学校だけで「こうしなさい。」と言っても保護者を巻きこまないといけないと難しい。家庭に帰ってからの時間が長いので、地域全体を巻き込んでいかないとなかなかうまくいかない。メディアとは、本来は便利で非常に価値があるものなので、その価値をどのようにして最大限生かしていくかという指導が重要になってくる。メディアに関することは学校の中だけでは成立しない教材になってきたので、保護者や地域の方をしっかり巻き込んでいけるということが重要になってくる。どうしてもそのインターネット上でおこる人間関係のトラブルは、学校側が対応するには限界があるものになってくるので、そのような研修などを保護者の方に聞いていただきたい部分はあるのではないかと。メディアに関しては学校だけ議論するのは難しい。保護者や地域の方も一緒に議論に入っていないと難しいものになっている。そういう意味ではチーム学校をつくっていくことが重要になってくる。
星田委員 (江南中校)	江南中校区は、幼稚園と小学校と中学校が近くにあり、幼小中の連携がしやすい環境にある。義務教育学校になるという話もあるので、それを想

長) 藤枝委員	定しながらできるところから取り組んでいる。校区の校長・園長会では、まずは先生方が仲良くなることが大切ということになり、そのために校長・園長が仲良くなる必要があると考えている。今日も午前中に幼小中連携について話をしてきた。小中一貫教育懇談会で話をする内容を伝え、何か付け加え等はないかを確認した。仲良くなるために校区の校長・園長会や懇親会をしている。肩肘を張った状態で話をしても話は進まない。できるだけリラックスした場で話ができる環境をつくっている。校区の校長・園長会では情報をしっかりと共有し、お互いに良い所と課題を共有することから始めている。そうするとお互いにあれをやってみようとか、これをやってみようかという案が出てくる。まず仲良くならないと何も始まらないと思っている。そこが原点だと感じている。 昨年度から取り組んでいることとして、江南ルールを小学生に説明している。中学生が小学校の高学年に行って、「江南ルールっていうのはこういうルールなんだよ。」ということ教えながらこどもたちレベルでメディアの使い方について交流をした。小学生から「ルールが守れないときは、何か罰があるのですか？」という質問が出た。それに対して中学生は「ルールを守るか守らないかということは自分次第。自分を律することが大事です。」という返答をした。中学生が小学生に話をする事で、中学生は改めて先輩の立場を自覚し、小学生も「こんな素晴らしい先輩がいるのだ。」と感じたと思う。以前ダンスの話をしたが、それも同じでこどもレベルでの交流をしっかり日頃から取り組む必要があると思っている。 本日の校区の校長・園長会で中学校の運動会と小学校の運動会でお互いを招待し、新たな種目を1つずつ設けてみようという話が出た。また、幼稚園の園長先生は、「こどもたちには本物に触れさせたい。」と言われた。例えば音楽だったら、江南中には吹奏楽部があり、昼休みにミニコンサートしているが、そこに幼稚園生を呼ぼうと考えている。そういうことをできるところからやっていくことが小中一貫教育では大事だと思う。 今日は数学の先生が小学校への乗り入れ授業をしていた。中学校での生活の話やゲーム感覚で学べる教材を中学校の先生が準備していたので、とても小学生は満足していた。 地域とのつながりについてだが、江南中校区は地域の方との繋がり強い。地域の花壇というものがあり、先日も地域の方がトラクターをもって来て耕されていた。そこでは小学生と中学生が地域の方と一緒に野菜を作ったり花を植えたりしている。そうすることによって地域の方が小学校と中学校をつなぐ役割を果たしてくれる。 向山幼稚園の近くには保育園がいくつかあるが、幼稚園の園長が保育園の園長を集めて、同じ小学校に入るかもしれないこどもたちのために会合をもたれた。 中学生は校区にこだわらず、色々な人と出会わせることが大事だと思っている。現在、江原中と合同で練習をしている部活動があるが、こどもたちは江南中の顧問の先生にも江原中の顧問の先生にも相談できる。小中一貫教育の殻に閉じこもるのではなく、小中一貫教育を基盤にして、こどもたちに色々な関わり合いをもたせることが、こどもたちを成長させていくと考えている。 近いうちに幼稚園のこどもが中学校にどんぐり拾いに来ることになっている。休み時間は中学生も外に出ている生徒がおり、幼稚園生をかわいがるだろう。このようにできるところから取り組み、基盤が固まってくると、義務教育学校になったときもスムーズにいくと考えている。
-----------------------	---

岡村座長	しろい。話にあったような花壇があると交流のきっかけになる。私の学校にも使えそうな花壇があるので、活用していきたい。 先生方が仲良くなるということに関して完全に同意する。まずは関係性である。小学校と中学校の先生の仲が悪くなってしまうシチュエーションがたまにあるが、原因のほとんどがお互いのことをわからない、よくわからないから不気味に感じるといったことからである。満員電車で他人のイヤホンからもれてくる音が気になることと同じで、よくわからないと人間は不快感をもつ。逆にオープンにして状況がわかると安心する。 特にAグループは地域の人たちの理解が非常に得やすいので、ぜひこれからも様々な地域を巻き込んだ先進事例をつくっていただいて、ほかの学校の参考になるとよい。
坂本委員 (天明中学校長)	天明校区は月に1回校長会がある。生徒指導に関することや2カ月前の行事についても話し合いをしている。お互いのカリキュラムを知ることや、管理職同士が仲良くなることが小中一貫教育のよさにつながると感じている。前回もお話した小中合同会議も月1回あり、先生たち同士で天明校区の児童生徒のどういう力を育成していくのかといったところで、小中学校でグループを組んで1年間の目標を決めながら、先生方の関係性も強くなってきている。 どのようにすればみんなが小中一貫教育のよさを実感できるかというところで、義務教育学校が令和9年度開校予定なので、小中一貫カリキュラムをつくっていかなければならないと考えている。要は総合的な学習の時間だと私たち校長は捉えており、小学校の総合的な学習の時間でどんな力をつけて、中学校での総合的な学習の時間でどんな探究的な力をつけていくのかということで研究をしているところである。統一したカリキュラムをつくりたいと再認識したのが、1年生が山都町にある「天明未来の森」に行き、木の成長を妨げている草を刈る作業（下草刈り）を行ったときである。「天明未来の森」に雨が降り注ぎ、地下水となり約50年かけて天明に水が届く。こどもたちは「小学4年生のとき、ここに来て作業をしたけれど、僕たちは草を集めたただけでした。」と言っていた。今回、中学生になったこどもたちが何をしたかということ、大きなカマを持って草を実際に刈る作業をした。自分たちで刈った草を集めるところに、小学校で取り組んだ内容をさらにステップアップして深い学びができる。3年生がこの前の授業参観の折に小中で取り組んだ内容を自治会の方や保護者、天明の水の会の方にプレゼンをした。自分たちは天明の未来のために何ができるのかというテーマで発信した。こういった取組をカリキュラムとして組んでいくことで、小中一貫教育のよさにつながっていくはずである。生徒が面白い、先生が面白いといったカリキュラムを5校の校長でつくっていきいたいと考えている。 教師は小中合同会議で仲良くなる。それが天明に赴任してきたよさにつながると思う。課題は学校間の距離が近くないので、こども同士を結びつける取組が何かできないかということである。ナイストライで保育園にペットボトルのリサイクルのおもちゃを持って行って交流はしているが、小学校との交流がまだできてない。 保護者に関する小中連携としては、市Pバレーボール大会に天明中と川口小と奥古閑小の3チームが出場した。練習試合を数回行い、みんなで色々な話ができた。
村上委員	カリキュラムをつくるという部分で、本校は今まで算数、人権、総合的

	な学習の時間はあったが、国語がなかったので、課題としている語彙力を上げるということで国語をつくっている。小学校の先生と中学校の先生でつくりあげていくので、とても連携が深まる。しかし、作成済みの算数、人権、総合的な学習の時間のカリキュラムは、それを異動してきた先生に復講するのにとても時間がかかった。小中一貫校を経験されてない方にとっては、若干負担がかかるのではないかと心配している。もし、小中一貫校の成果物を閲覧できる場所があれば、まだ取組が途中の学校も見ることができたり、進んでいても他の学校のものを参考にしたりできる。次の学校に異動が決まったときに見てみようという気持ちになる先生もいるのではないか。そういったものが学校のホームページ以外にあるとよい。学校ごとにと組の差がある。カリキュラムを一生懸命つくっている時はいいが、異動に伴い新しい職員になった時に温度差が出てしまう。そこを平らにするのは大変だと思うが、良い策はないか。
坂本委員 (天明中学校長)	本校区では、4校の小学校から総合的な学習の時間の担当が夏休みに集まって、カリキュラムの確認や調整をしている。中学校はカリキュラムを横断的、系統的にするために試行錯誤状態である。私が今考えているのは、職員会議や夕会の時に3分でもよいから、各学年の総合的な学習の時間の担当が今の進捗状況やどんな課題があるのか、この取組はあまり効果がなかったというものも含めて発表する時間を2学期からとることである。他学年で今何をやっているのかわかっていない現状がある。これらを通して総合的な学習の時間や人権学習などについて先生たちの意思疎通を図っていきたい。
新川委員	吉松小にいたときに、校長からの提案で、曜日と時間を決めてカリキュラムの一部分をこどもと共有する時間が設けられていた。それは新しく来た先生にとっては、こどもと共有しながら自分もわかるのでとても良いと思う。
村上委員	隙間時間で繰り返しやっていくしかない。カリキュラムを説明するためのまとまった時間は取りにくい。
横山教育審議員	昨年度まで天明校区にいたが、一昨年から小中合同会議を始めた。カリキュラム作って終わりではなく、去年からどう変えていくかというPDCAサイクルでやっていくと、新しく来られた先生方も自分が作っているという感覚になっていく。成果物を見るのも良いが、去年のカリキュラムをもとにして、今年の自分たちがつくるという取組をしていくとさらに良いものになり、先生たちも自分でつくったという気持ちになる。
岡村座長	私は生活科と総合的な学習の時間を専門としている。生活科と総合的な学習の時間は活動のテーマありきになりやすいが、活動テーマが他の教科と比べて系統性をもちにくい部分がある。例えば、小学3年生と小学5年生で取り組んでいる内容が一緒だけれども、しっかりリンクが張られていないことがある。中学校に上がったときも同じである。カリキュラムをつくっているときは先生方が当事者意識をもって試行錯誤されているので熱量も高く、それが良い意味での伝統になるとよいが、形骸化して枠だけが残るとことがある。これはまさしく小中一貫教育のカリキュラムについても同じで、つくった先生方には非常に思いがあり、そのときにおられた先生方もその思いを共有しているが、新しく来られた先生方に当事者意識をもってもらうにはどうすればよいかという意味では、我々が試行錯誤

	し続ける環境をつくっていかねばならない。先生が当事者意識をもたずに子どもたちが探究テーマについて学んでいる状態では、一部の子どもたちしか探究的な活動になっていかない。総合的な学習の時間は学校をつなぐという点でも、地域とつながるという点でも私は可能性を感じている。 先ほど話が出たように、教育委員会としてもどのように情報を発信していくのかという部分はとても大切だと思っている。 地域発信という点で工夫されていることはないか。
坂本委員 (天明中学校長)	学校のホームページに総合的な学習の時間や授業の様子を発信している。隣の天明まちづくりセンターにも掲示物などを展示していただいている。
岡村座長	まずはホームページが中心になると思うが、最近、私が学校運営協議会に入らせていただいている大津の小学校では、学校のホームページで児童が情報発信をしている。子どもたちの任意のチームでペンネームを使いながら、好きな食べ物を一言だけ書いたり、運動会の練習のことを長文で書いたりしている。校長先生も積極的に参加されている。子どもが情報発信する形も1つの方法である。もちろん、子どもたちにメディアリテラシーを教える先生がいて成り立つことではあるが、子どもたちがメディアを使いこなしていくという点でも面白い取組である。
坂本委員 (鹿南中教頭)	小中一貫教育において、子どもたちは小学校の子どもたちと関わることでそのよさを実感しやすいと感じている。夏休み前に保護司会から中学生の標語を立て看板にして、それを小学校に持って行きたいという申し出があった。とりあえず生徒会に降ろして、生徒会で取り組んでいくことになった。生徒会が「小学校に設置する標語を募集します。」と全校に投げかけた。応募されたものの中から生徒会の子どもたちが看板にする作品を選んだ。次に、立て看板を作るためにペンキなどで塗る作業が必要だということで、ボランティアを募り完成させた。実際に小学校に持って行くことを子どもたちに知らせると、多くの子どもたちが集まった。選ばれた標語はその生徒の出身小学校に持っていくことになり、作品をつくった生徒はとても喜んでいて、学校で企画したものではなかったが、実際に小学校と関わる中で子どもたちは交流のよさを実感しやすいと感じた。 昨年度の取組でいくと、乗り入れ授業で美術の教員が小学校の図工の授業へ、音楽の教員が卒業式前の合唱の練習の指導に入った。職員は行く前は負担を感じながらであったが、実際に行ってみると楽しかったと言っていた。中学校の専門性のある教員が指導することにより、小学校の先生方も「こんな指導方法があるのか。」と学ばれていた。小中一貫教育のよさを実感できる部分だった。 ただこのようなよさを職員に伝えていくとなると難しい部分がある。我々管理職は色々な情報が入ってくるので、よさを感じやすいと思うが、他の職員に言ったところで他の職員は「ああ、そうですか。」ぐらいで終わってしまい、自分がやってみたいと思う人がなかなか出てこないのが現状だと思う。色々な場面で体験をしていくことが必要だと思う。 保護者も交えてということになると難しいところがある。例えば、前の学校の時には私は管理職ではなかったが、校区の小学校のPTA会長の名前も顔も分かっており、話す機会があった。しかし、コロナ禍だったということもあってか、小学校のPTA会長と会う機会が減った。職員と小学校の保護者と会う機会を何かつくらないと連携は難しいと感じている。

福田部長	昨年度の乗り入れ授業を受けた児童が中学校に入学していると思うが、「こういったことにつながった。」というようなよさを感じられたことはないか。
坂本委員 (鹿南中教頭)	中学1年生にアンケートを取ろうと思いながら、まだ実施できていない。ただ不登校については減少している。これについては効果があったのかもしれない。
岡村座長	標語が選ばれて自分の小学校に自分の作った標語が飾られた中学生はかなり嬉しかったのではないかなと思う。どうせなら飾りに行くのも中学生ができるとうい。取組としては小中連携に繋がる印象をもった。美術の先生がもしそういうことができるような方であればカリキュラムに取り込んでみると面白いと感じた。兄や姉がつくった標語が自分の小学校に飾られたら弟や妹としては、すごくうれしい気持ちになる。それはまさしくこども同士の関係性がつながっていることになる。
中釜委員	こどもにとってよさを実感できる場面として、小学生が中学生と交流をすることで中学校に入るための心構えができ、不安感が多少解消されたと感じた。先生方も学校間の情報共有ができ、情報があるとそれに合わせた対応ができるというところでよさを実感できていると感じた。保護者にとってもこどもが安心して中学校に入学できるということは嬉しいことである。管理職の先生方が仲良くなることで、それぞれの学校の職員の関係も強くなるという話を聞いた。PTAでは、二岡中と託麻東小は1小1中なので、小学校と中学生のこどもさんがおられる保護者が多い。PTAの役員決めをするとき、小中学校間で取り合いになる場面があった。PTAも小学校と中学校で連携をしていく必要があると今日の話聞いて感じた。 地域との関わりという点では、託麻東小校区の地域の方には熱心に協力をしていただいている。月1回の会議には、小中の校長、小中のPTA会長も参加して発言したり、情報共有をしたりしている。まずは地域の集まりで情報を発信していくことが大切だと感じた。
藤枝委員	先生同士が仲良くなるということがまずは大事だと感じた。保護者の温度感というものがあって、校長先生が「やるぞ」と言っているところに保護者も一緒に「やるぞ」となればいいが、そうならない場合もあると思う。みんなをうまくまとめ、巻き込むにはどうすればよいかを日々考えている。学校は頑張ろうとしても保護者が冷たい感じだったり、逆に保護者の頑張ろうとしても学校と連動がとれなかったりすることがある。間を埋めようとすることよりも、どのようにしてベクトルを同じ方向に向けていくかということが大事だと思う。やはり中心にはこどもがいて、こどもが楽しいこと、学びがあることを意識しながら、良い方向にいく考え方を保護者の中でも共有していかなければならないと感じた。まずは先生方も保護者も含め大人が楽しむことが一番大事だと感じた。大人の楽しい姿を見ることで、こどもたちも楽しい気持ちになっていくという視点を持ちながら、PTAとしても取組を考えていきたい。
岡村座長	保護者の方にも小中一貫教育についてまず知っていただくということが重要である。小学校のPTAと中学校のPTAが連携を取れるような形が出てくるとよいが、そのためにはまだまだ保護者や地域の方々が小中一貫教育というシステム自体をご存知でない状況をふまえ、学校や教育委員会

	が情報を発信していく必要がある。そのためにはホームページも1つだが、何か情報を発信する仕組みをつくれれば良いと感じた。 みなさんからお話を伺い、それぞれの学校が負担を感じることもありながらも、できることをたくさんやったださっていると思う。これらの良い取組をどのように発信していくかということが懇談会での大きなテーマである。それは先生方が今勤務されている学校の保護者や地域の方々への発信もそうであるし、他の学校が小中一貫教育、幼小連携教育の取り組みを知ることができるための発信も含んでいる。本当に色々な充実した取組が出てきたので、その取組がもっと先生方に広がっていくような発信のあり方というのを考えていければよいと感じた。 これで意見交換を終了させていただく。事務局にお渡しする。
--	--

6 事務連絡

7 閉会